



## 70年代イタリア・フェミニズム史の再検討 : 家事労働賃金要求運動を中心に

著者	伊田 久美子
引用	女性学研究. 21, p.93-119
URL	<a href="http://doi.org/10.24729/00004861">http://doi.org/10.24729/00004861</a>

## 論文

## 70年代イタリア・フェミニズム史の再検討： 家事労働賃金要求運動を中心に

伊田 久美子

### はじめに

第二波フェミニズムが産業先進国を中心に同時多発的に登場した1970年代、イタリアにおいても特色あるフェミニズム運動が展開した。その社会的成果は大きく、離婚法制定、家族法改正、中絶法制定、男女雇用機会均等法制定、そして「名誉犯罪」情状廃止など、70年代から80年代にかけて女性をとりまく状況は大きく進展した<sup>1)</sup>。

イタリア・フェミニズムの多様な潮流の中で、国際的なインパクトを發揮した潮流のひとつが「家事労働に賃金を」のスローガンで知られるマリアローザ・ダラ・コスタ (Mariarosa Dalla Costa) とロッタ・フェミニスタ (Lotta Femminista) である。セルマ・ジェイムズ (Selma James) との共著として1972年に発表され、ジェイムズによって英訳された *Potere femminile e sovversione sociale* (女性の力と社会の転覆。邦訳は1980年でタイトルは「女性のパワーと社会の変革」<sup>2)</sup>) は、「労働」をめぐるフェミニズムの新たな視点を提供し、家事労働をめぐる一連の論争の契機となった。この動きは70年代以降の開発経済学における「途上国」女性の労働の焦点

<sup>1)</sup> カトリック国イタリアでは離婚が制度的に可能になったのは1970年のことであり、その後1974年には離婚法廃止を求める国民投票（戦後第2回目）が実施されたが、離婚法は支持された。家族法の改正（1975）でようやく夫婦平等原則が確立した。先進的な内容を含んだ雇用機会均等法は1977年に成立した。中絶は他の国々同様、もっとも激しい争点となった課題であったが、1978年に一定の条件下での中絶を認める法律が成立し、1982年国民投票によって支持されるに至った。名誉犯罪（家族の名誉を傷つける性的な「逸脱」行為に対する殺人などの犯罪）の情状酌量措置が廃止されたのは1982年になってのことであった。

<sup>2)</sup> 邦訳はセルマ・ジェイムズ訳による英語版からの翻訳である。

化とともに、アンペイド・ワーク（無償労働）の可視化と評価という国際的な政策課題への展開にも一定のインパクトを与えた。ナイロビ将来戦略120条（1985）には家事労働の評価についての意義が明記されたが、その際もダラ・コスタの共著者であり英語への翻訳者であったセルマ・ジェイムズのナイロビ会議におけるロビー活動が大いに貢献したことは注目に値する。

しかしイタリアにおいてこの潮流への言及は、あたかもある種のタブーがこの潮流を取り巻いているかのように、かつて今もきわめて少なく、言及される場合も多くは単に列挙する程度の限定的な記述にとどまっている。イタリアでは、すでに先駆的には70年代から第二波フェミニズム関連の資料館が各地で開設され始め、70年代末から80年代に入って本格的に取り組まれるようになった。90年代からは、インターネットを利用したネットワーク形成が活性化した。そうした動きの中で、保存された貴重な資料をもとに、多くの優れた研究が蓄積されてきた。しかしこれらの研究において、家事労働賃金要求運動やロッタ・フェミニスタ、そして代表的な活動家であったダラ・コスタ、イタリアの運動に大きな影響を与えたジェイムズ等への言及は皆無ではないにしても、きわめて限定的であり、それも補足的な記述にとどまっているのである。

マリアローザ・ダラ・コスタ、およびともに活動してきたジョヴァンナ・フランカ・ダラ・コスタ（Giovanna Franca Dalla Costa）らの著作の訳者としての筆者は、労働論の転換に大いに寄与したこのグループの理論的貢献は重要であると考えており、イタリアにおける今日までの、ほとんど無視に近い、言及されても単に列挙されるのみという極端に周辺化された状況は理解しにくい。

本稿の目的は、ロッタ・フェミニスタ（以下LF）と家事労働賃金要求運動の歴史を80年代以降の70年代イタリア・フェミニズムの歴史再構築の動きの文脈の中で再検討することである。より具体的には、イタリア・フェミニズム運動史において家事労働賃金要求運動が「消去」とまでは言えないにしても、周辺化されてきたプロセスを、フェミニズムの歴史における「労働」概念の見直しの問題提起をめぐる模索と闘争、そして挫折の歴史

として読み直す試みである。経済格差の拡大と貧困に社会的注目が高まっている今日、フェミニズム研究は労働問題へのコミットの不十分を問われることが少なくない。しかし70年代フェミニズムは「労働」を女性の視点から根底的に問い直す問題提起を行っていたはずであり、そうした視点は同時代において国境を越えて広く共有されていたと思われるのである。それがイタリアにおいて、どのようなプロセスを辿って挫折していったのかについては、今日まで再構築されてきた70年代フェミニズムの歴史の中で、きわめて不十分かつ断片的にしか言及されていない。イタリアの70年代フェミニズム史の再検討は、労働力の女性化のグローバルな進行を経た今日において、70年代以上に必要性を増している「労働」概念の見直しという課題に対して、一定の貢献をすることができるのではないかと考える。

本稿の構成は次の通りである。第1章では70年代後半期以降のイタリア・フェミニズムの資料収集保存を進めるアーカイブ構築の主な動向を概観し、第2章で70年代イタリア・フェミニズム研究におけるLFと家事労働賃金要求運動についての言説を、その不在も含めて検討する。第3章では、70年代イタリア・フェミニズム運動史再構築の特徴と課題を、第二波フェミニズムの初期の時代の「労働」と「身体」、「政治」と「意識」の統合の試みとその挫折として考察し、フェミニズムと「労働」の関係を再考する作業の端緒としたい。

## 第1章 70年代イタリア・フェミニズムのアーカイブ構築運動

イタリアのフェミニストたちが運動資料の収集と保存を開始したのは、本格的には70年代後半のことであった<sup>3)</sup>。現段階で知りうる限り、すでに1975年にパドヴァで資料館CDD (Centro di documentazione della donna di Padova) が立ち上げられ、その活動は70年代フェミニズムの代

---

<sup>3)</sup> Zanetti (1998) によれば、北イタリアではパドヴァのCDDが最初の資料館であったが、ローマでは1972年にCentro di Documentazione e Studi sul Femminismoが、翌1973年にはBiblioteca del Teatro La Maddalenaが開設されていた (Zanetti 1998 : 150)。

表的月刊誌であったEFFE誌上に同時代の動きとして掲載されている。この動きについてはZanetti (1998) にも記載がある<sup>4)</sup>。1979年にはミラノの社会主義者でフェミニスト活動家であったエルヴィーラ・バダラッコ (Elvira Badaracco) がピエレッテ・コッパ (Pierrette Coppa) とともにCSSMLDI (Centro di studi storici sul movimento di liberazione della donna in Italia: イタリア女性解放運動史研究センター) を設立した。同じ時期にボローニャではイタリア女性図書館の運営母体となるオルランド協会 (Associazione Orlando) が発足し、1978年から80年の時期には、ピエラ・ズマッリーノ (Piera Zumaglini) を中心とするトリノのフェミニストたちによる資料収集と70年代の女性運動史の再構築の試みが開始されていた (Zumaglini 1996: 14)。ローマでは1979年にゴヴェルノ・ヴェッキオ通りで運営されていた「女の家」にヴァージニア・ウルフの名を付けた資料館が設立された。1981年にはミラノで国際セミナー Centri di ricerca e documentazione delle donne: esperienze di organizzazione e metodi di archiviazione (女の研究資料センター: 運営の経験と文書保管方法) が開催されている<sup>5)</sup>。1986年には各地のアーカイブをつなぐネットワークが立ち上げられ、この動きは後年Rete Lilith (ネットワーク・リリス) としてインターネットによるイタリア各地のフェミニスト・アーカイブ情報の集約とデータベース構築という画期的な発展を遂げ、ウェブ・アーカイブとしてイタリア国内だけでなく、グローバルな女性情報・資料のネットワークを形成していく。

こうした70年代後半にはすでに活性化し、80年代から90年代にかけて目覚ましく成長していったイタリア・フェミニズムの資料収集とアーカイブ構築の運動は、経済的にもマンパワーの面からも、草の根の女性運動家た

<sup>4)</sup> CDDは1978年に活動を停止し、その後資料の多くをCSSMLDI (イタリア女性解放運動史研究センター) に寄贈した (Zanetti 1998: 153)。

<sup>5)</sup> Atti del Seminario internazionale "Centri di ricerca e documentazione delle donne: esperienze di organizzazione e metodi di archiviazione", Milano, 26-27 novembre 1981 / a cura del Centro di studi storici sul movimento di liberazione della donna in Italia. - Milano: Centro di studi storici sul movimento di liberazione della donna in Italia, (1981).

ちの私的な努力によって設立・維持されてきた。80年代後半からは、いくつかの資料館は、自治体、イタリア政府、EUなどの援助を獲得する機会にも恵まれるようになるが、基本的に志を持った運動当事者たちが資料収集保存活動を担っているのである。

以下ではまず80年代からイタリア各地の様々なアーカイブ構築の動きをつなぐ重要な役割を果たしたネットワーク・リリスの歴史を検討し、さらに今日まで維持、発展してきた代表的資料館であるバダラッコ資料館、ローニャの女性図書館および資料館、トリノのズマリーノ資料館の歴史と現状を概観する。イタリアには他にもローマ、ジェノヴァ、モデナ、フィレンツェ、ヴェネツィアなど、各地に多くの資料館が存在し、イタリアの70年代フェミニズム運動と同様に、それぞれの地域的特色をもった活動を行っているが、包括的検討は別の機会に譲り、本稿ではアーカイブ構築運動の主力となってきた三つの資料館に焦点を当てることにしたい。

### 1.1 ネットワーク・リリス

アダムの先妻の名を冠して1993年に立ち上げられた、この画期的なウェブ・ネットワーク誕生までには、イタリア各地におけるフェミニストたちの長年のアーカイブ運動の蓄積がある。先に触れた1981年ミラノのイタリア女性解放運動史研究センター（CSSMLDI）によって開催された国際セミナーを契機とし、1986年ピサ女性資料センターによる女性をテーマとする初めての文献リスト作成（これは雑誌*Memoria*14号に掲載された）や、同年シエナで開催された「女性センターの女たち：80年代における女の政治と文化」と題する全国会議の準備過程で、後に「リリス」となる、イタリア女性資料研究センター連絡会（Coordinamento dei Centri di Documentazione e studi delle donne in Italia）が形成された。1988年にはイタリア内外の女性センターの連携の構築をめざして、ECの支援により、CSSMLDIによって、国際会議*Perleparole:Le iniziative a favore dell'informazione e della documentazione delle donne europee*（ヨーロッパ女性情報資料に向けた取り組み）が、翌1989年には*Linguaggiadonna*（女の言語）と題した同様の会議が開催された。1991年には新しいIT技術を

利用した連携を推進する10団体（現在までに50以上に拡大）がフロッピーディスクによるデータベースの共同使用の合意に至った。

こうした連携を基盤として、1993年に公式に「リリス」と名乗る全国組織が立ち上げられた<sup>6)</sup>。1993～95年の間、ECのNOW（女性に対する新しい機会）プロジェクトの助成により、女性資料保管講座を実施し多くの文書保管員を育成した。1995年からは、ネットワーク・リリスはデータ通信を導入し、とくにボローニャのオランダ協会インターネット検索やナビゲーション、電子メール使用、ホームページ制作などの講座を展開するようになった。1996年にはボローニャのServer Donne上にウェブサイトを立て、メーリングリストを開始し、1997年からはパレスティナ、レバノン、ヨルダン、エジプトなど、ネットワークは国境を越えて展開している。今日ネットワーク・リリスのオンラインカタログ（OPAC）は女性センター、フェミニスト文書館、UDI（イタリア女性連合）グループなどの情報を網羅する検索システムに加えて、代表的なフェミニスト雑誌も含め、広くイタリア全土の女性資料情報を網羅している。とくに早くからOPACが使用できるようになったのはトリノのピエラ・ズマッリーノ資料館、ジェノヴァの女性労働文化連絡会議資料館などである。

イタリア・フェミニズムのアーカイブ運動はウェブを利用したネットワークをいち早く取り入れることにより、大きく発展した。ヒエラルキーや中心を作ることなくピアなネットワークを国内外に広げていくことを可能にするウェブ・ネットワークは、地域的独立性の高いイタリアの運動には、適格的であったと言える。

## 1.2 エルヴィーラ・バダラッコ財団（ミラノ）

現在イタリアでもっとも充実した70年代フェミニズムのアーカイブのひとつが、この財団の文書館である。エルヴィーラ・バダラッコ財団の前身は、1979年にバダラッコ<sup>7)</sup>とピエレッテ・コッパによって設立され活動してきたイタリア女性解放運動史研究センター（CSSMLDI）である。財団は、

<sup>6)</sup>当初はフィレンツェに本部をおき、その後キャリアに移行した。

CSSMLDIを発展的に継承する機関として、1994年に逝去したバダラッコの遺志と遺産によって同年設立された。

CSSMLDIは当初はフェルトリネッリ財団に、1991年からはイタリア女性連合（Unione Femminile Nazionale）に場所を得て活動し、1994年からはバダラッコ財団として新たな活動を展開してきた。2008年からは自立した資料館として、新たな資料の収集整理の活動を行っている。CSSMLDI時代からの活動は1）女性の政治運動から生まれた資料の収集とアーカイブの構築、運営、2）ジェンダーのテーマに専門特化した図書館の創設、3）イタリアにおける女性の政治的文化的プレゼンスを高める研究や事業活動の推進の3分野で展開されてきた。財団の立ち上げ以降は、資料研究の成果物としての書籍や叢書の編集、刊行が加わった。

イタリア・フェミニズムの活動グループ関係資料は1966年から1997年に及ぶ膨大なものであるが、そのほとんどが整理され閲覧可能な状態で保管されている。財団ホームページの資料解説によると、次の4点がその特徴である<sup>8)</sup>。

- (1) 地域的にはロンバルディア、とくにミラノが多い。つづいて、ヴェネト、エミリア・ロマーニャ、ラーツィオ、シチリア、トスカーナが続いている。この資料館がミラノのフェミニスト運動によって設立、運営されていることから、この地域的偏りは必然的に生じているが、このように他の地域の資料もまた豊富に収集されており、イタリア全体の動向を俯瞰することができる構成である。
- (2) 70年代初頭から80年代初め、および80年代末から90年代前半の二つの量的ピークがある。

---

<sup>7)</sup> Elvira Badaracco (1911-1994) イタリア社会党党员として女性問題に精力的に取り組み、UDI（イタリア女性連合）のメンバーでもあった。地方自治体の議員や党の県や州の女性代表をつとめたが、党の方針との齟齬を感じ、1979年にイタリア女性解放運動史研究センター（CSSMLDI）を設立し、1994年に逝去するまで理事長をつとめた。バダラッコの遺志によりセンターは財団となり女性運動資料館としての活動を継続発展させている。

<sup>8)</sup> [http://www.fondazionebadaracco.it/archivi/archivio\\_femminismo/unit1.htm](http://www.fondazionebadaracco.it/archivi/archivio_femminismo/unit1.htm)  
(バダラッコ財団HPより 2014年1月31日最終閲覧)



- (3) 時代を超えた共通テーマは、セクシュアリティ、欲望、女同士の愛、権力と政治、暴力、健康、労働、教育である。
- (4) それぞれの時期に特徴的なテーマは、70～80年代初めがセクシュアリティ、母性（妊娠出産）、中絶、避妊、離婚、80年代は女の心理的困難、性暴力、差異の思想、女の歴史、90年代は戦争、機会の平等である。

「イタリア国内フェミニズム・アーカイブ」には659通の資料が登録されており、そのうち60年代から70年代のものが301通と、ほぼ半数を占めている。解説ページにおいて、これらの資料に含まれる70年代フェミニズムの重要なグループとして挙げられているのは、主にミラノで活動した、Anabasi、Casa delle donne di via Col di Lana、Collettivo femminista di via Cherubini、Demau、Libreria delle donne di Milano等々である。いずれも後年の研究等において70年代イタリア・フェミニズム運動を代表するとされてきた団体である。一方、多くの都市に支部を作り、都市を超える広域な活動を展開したグループとして第1に挙げられているのがLFであり、つづいてAED（Associazione educazione demografica）、l'MLD（Movimento di liberazione delle donne）、Rivolta femminileが挙げられている。このミラノのアーカイブの中でのLFの存在感は無視することができず、それなりに認知されているようにも見える。LFと家事労働賃金要求運動グループの資料は70年代資料301通のうち31通と、1割を占めている。

バダラッコ資料館には豊富なポスターのコレクションがあり、1997年にはポスターを通じてフェミニズム運動を振り返る展示会が開催された<sup>9)</sup>。ここでも70年代のポスターの中でのLFと家事労働賃金化運動のプレゼンスはきわめて高く、70年代のポスター21枚のうち7枚と、3分の1を占めている<sup>10)</sup>。

---

<sup>9)</sup> Riguardarsi: Manifesti del movimento politico delle donne in Italiaが展示会の名称である。同年に同名のカタログが刊行されている（Annarita Buttafuoco&Emma Baeri(a cura di) 1997）。

### 1.3 イタリア女性図書館・資料館（ボローニャ）

ボローニャのイタリア女性図書館は、イタリアでもっとも重要な女性と女性問題に関する専門図書館である。図書館は1982年に、ボローニャ女性資料センターの中の一部門として女性研究者やアクティヴィストらの文化活動グループであるオルランド協会によって開設され、ボローニャ市およびエミリア・ロマーニャ州の援助を得て運営されている。1989年からは国際的ネットワークの中でイタリアを代表する図書館としての運営へと移行し、1998年からは、政府文化財文化事業省の財政支援、さらに、いくつかの事業に対してはEUの助成も獲得している。ここには70年代末に設立されたフェミニズム資料館があり、60年代末からの運動に関する一次資料を収集保存し、カタログを地方自治体やボローニャ大学のオンライン検索に提供している。ネットワーク・リリスにサーバーを提供しているのは、1994年にオルランド協会によって立ち上げられたServer Donne（「女たちのサーバー」の意）である。かつてサンタ・クリスティーナ修道院であったボローニャ大学所有の歴史的建造物の中で、このイタリアでもっとも充実した女性図書館、資料館が運営されている。近年は政府文化財文化事業省の援助により19世紀からの文献資料や70年代の雑誌、ポスターなどのデジタル資料館の構築が進められている。

運営の母体であるオルランド協会は、女性に開かれた文化的空間の提供をめざして70年代末にボローニャを拠点とする女性活動家や研究者によって設立され、上記資料館、図書館、さらにはサーバーの運営を担いながら、様々な文化事業を実施している。当初の目的どおり、この図書館、資料館の空間は、多様な世代の多様な関心やニーズに応えつつ、女性たちが集う空間を提供し、イタリア内外にネットワークを広げながら、バーチャルなインターネット空間においても同様の機能をはたしている。

---

<sup>10)</sup> Riguardarsiのカタログ中に制作年代も団体も不詳とされるポスター（n. 20のDi chi è questa pancia? で始まる、女性の身体についての自己決定権を主張するポスター）があるが、家事労働賃金化運動グループによるものであることを示す一次資料をパダラッコ資料館で筆者が発見した。1973年のボローニャのLF資料（B6f14）に同じポスターがLFの名前で掲載されている。

#### 1.4 ピエラ・ズマッリーノ資料館（トリノ）

トリノのフェミニスト、ピエラ・ズマッリーノ<sup>11)</sup>の遺志により、生前ズマッリーノが長年にわたって収集したトリノのフェミニズム運動を中心とする資料と遺産により1995年にトリノの女の家に設立され、フェミニズム運動資料のさらなる収集保存活動を継続している。設立当初からネットワーク・リリスに参加し、アーカイブ・プログラムの製作に貢献した。資料館の活動はズマッリーノが収集した70年代から90年代に及ぶ資料に、他の団体や個人の資料が加わって豊富化している。ズマッリーノの資料はピエモンテ州文化評議会の助成を得て、整理、登録が進み、閲覧可能である。1996年には60年代から70年代半ばまでのトリノのフェミニズム運動についてのズマッリーノの遺作原稿を中心に*Femminismi a Torino*（『トリノのフェミニズム』）を出版した。

70年代の政治運動は、80年代には女の本屋、劇場、女の家など、文化運動や女性の拠点作りへと転換していく。後年ミラノのフェミニストたちはこの時代の変化を「フェミニズム運動からフェミニズムの拡がりへ」と表現する<sup>12)</sup>。こうした変化の中で、資料センターの構築などのアーカイブ運動が活性化していった（Guerra 2004）。ここで取りあげた代表的な三つの資料館には共通する特徴がある。ひとつは、いずれもがネットワーク形成に強い熱意を注いだことである。ネットワークとは、ヒエラルキーや中心を形成することなく様々なグループを結ぶ情報の連携であり、アーカイブの発展には無くてはならないものである。既に述べたように、70年代末

<sup>11)</sup> Piera Zumaglini (1942-1994) トリノの女性運動を代表するフェミニスト。イタリア内外の女性団体のネットワークの形成に尽力した。1978年に設立されたトリノの女を家の運営を設立当初から担った。60年代後半から70年代の多くの貴重な運動資料を収集保存し、フェミニズム運動の歴史の再構築をめざしていた。1994年に逝去した後、その遺志を受け継いで設立されたズマッリーノ資料館により、1996年に遺稿を中心とした*Femminismi a Torino*（『トリノのフェミニズム』）が出版された。ズマッリーノは70年代フェミニズム運動の多様性、複数性を尊重する歴史の再構築をめざしていた。このタイトルの“Femminismi”が複数形であることに本書の特色が現れている。

<sup>12)</sup> A.R.Calabrò&L.Grasso (1985) *Dal movimento femminista al femminismo diffuso*, Fondazione Badaracco, FrancoAngeli, Milano.

から80年代末まで、いくつものエポックメイキングな国際シンポジウムを開催し、それによってイタリア・フェミニズムのアーカイブ構築運動は成長していったと言える。80年代を通じて現実世界において形成されていたネットワークは90年代に入るとただちにIT技術を導入した「ネットワーク・リリース」として、新たな成長を可能にしたのである。

もうひとつは、いずれの資料館も、それらをつなぐネットワーク・リリースも、後年になって公的な資金援助を得るに至ってはいるが、基本的に個人としての女性がボランタリーに始めた活動であるということである。

イタリアのフェミニストたちが歴史にその足跡を残すことを強く望んだのは、終わりつつある政治の季節の女たちの運動であった。激動の時代に膨大に作成された資料を集め保存し整理研究し記述するための拠点が求められた。このような女の拠点作りやアーカイブ構築は、故人の遺産によって設立されたバダラッコ資料館やズマッリーノ資料館、22名の女たちによって立ち上げられたオランダ協会に典型的に示されるように、基本的にフェミニスト自身の私的な資金とネットワークを駆使した努力によって進められてきた<sup>13)</sup>。

資料の収集保存の目的は、後の世代に70年代前後からの新しい女性運動の足跡を伝えることであった。70年代の終わり頃、政治の季節の終焉をフェミニストたちは感じ取っていた (Zancan 2003)。従来の歴史認識においては無視され、忘れ去られかねなかった女の歴史を伝えることは、ズマッリーノを中心とするトリノのフェミニストたちが目指したように、まさしく歴史の再構築である。女たちが運動資料を残すことにこれほど情熱を注いできたのは、歴史研究の正史からつねに外されてきた女の動きを保存し後に伝えること自体がフェミニズムの闘いだからである。70年代フェミニズムの特色は、「個人的なことの政治性」を問うことにあり、伝統的歴史

---

<sup>13)</sup> 私的営為としての女性の拠点づくりは、古くは19世紀末に結成されたUnione Femminile Nazionale「イタリア女性連合」に示されている。「連合」はミラノの中心部に大きなビルを購入し、多くの女性団体に活動の拠点を提供した。建物が私有物であり私的に運営されていたからこそ、政治的な動向に脅かされることなく、ファシズム政権下での弾圧にも耐えてこの拠点を防衛し、戦後いち早く活動再開することができた。バダラッコ資料館にも2008年の自立まで、資料保存と活動の場を提供した。

の中に記憶され記録されることの困難な、こうした運動の記録は、その価値を知る者たちの私的貢献によってはじめて、残すことが可能であったと言える。

70年代の他の運動にも共通の傾向であるが、この時期のフェミニズム運動の顕著な特徴のひとつは無名性であった。多くの優れた論考がグループ名で書かれ、個人名が記されている場合でも、その多くは珍しくもないファーストネームにとどまっていた。他の国々同様、イタリアの70年代は激動の政治の季節であり、女性運動にとっても離婚、中絶、家族法、雇用均等法、女性に対する暴力の厳罰化等々、政治運動の課題が山積する中で、必要に迫られて次々に書き飛ばしていった結果ではあっただろう。パダラッコ資料館HPでは「かなりの数のビラ、請願書、立場表明文などが日付も署名も付されていないが、それは当時の切迫した状況と熱意を示している。歴史的記憶への注意と配慮は、もっと後年、80年代になってから生じることとなる。」と解説されている<sup>14)</sup>。

しかし署名の不在にはもっと深い意味があるのではないだろうか。無名性、匿名性は、60年代後半からのラディカリズム全体の特徴であったが、とりわけ70年代フェミニズムにはその傾向が顕著であった。個人的努力によって個人として男性並みに近づこうとする女権拡張の男女平等を覆し、「女」という主体を獲得し主張していったこの運動において、女たちには個人としての自らを歴史に残そうという意思は希薄であったことだろう。だからこそ、この貴重な無名の資料を収集・保存し後の世代に伝えていくことが80年代フェミニズムの重要な課題となったのである。無名の女たちによる歴史の再構築は、従来の歴史観自体を根底からゆさぶる政治的インパクトを持っていた。英語圏でのher-storyという造語には、歴史の行為主体としての女性の物語の確立への強い意志が込められている。

しかしイタリア語において「歴史」と「物語」が“storia”という同じ語で表されることに端的に示されるように、歴史とは「客観的」な出来事

<sup>14)</sup> [http://www.fondazionebadaracco.it/archivi/archivio\\_femminismo/unit1.htm](http://www.fondazionebadaracco.it/archivi/archivio_femminismo/unit1.htm)  
(パダラッコ財団HPより 2014年1月31日最終閲覧)

の記述ではなく、後世の特定のまなざしと関心によって構築され、語られる物語であり、歴史の再構築とは、まさしく様々な歴史観の間で繰り広げられる権力闘争への参戦にほかならない。女性運動の歴史の再構築は、無名の女たちの歴史など取るに足らないとする「家父長的正史」への挑戦であった。しかしこの無名の女たちの歴史もまた、有力な対抗的認識枠組みに沿った暗黙の方針によって情報そのものが選別、取捨選択され、一定のまなざしの下に再構築されていくのであり、正統性をめぐる闘争を免れることはできない。当然ながら、語られない歴史の抹消は、her-storyの中でも起こりうるのだ。

## 第2章 70年代フェミニズム運動史の再構築

80年代に入るとすぐに、非常に近い過去である70年代フェミニズム研究が活性化し、多くの運動史が内外の研究者によって書かれてきた。すでに開始されていたアーカイブ構築による資料収集保存運動とともに、当事者への聞き取りなどのオーラルな情報収集も行われ、同時代に書かれた資料と過去を振り返って語られた資料に基づく70年代フェミニズム運動の歴史再構築が、資料館ネットワークの活性化とともに進められていったのである。

冒頭で述べたように、そこではLFおよび家事労働賃金要求運動が主要なテーマとして取りあげられたことはほとんどない。言及されている場合も、さまざまな潮流のひとつとして列挙されるか、あるいはほとんど追加事項として付記されるにとどまり、総じてその国際的なインパクトに比して扱いは軽く、十分に論じられているとは言えない。

今日70年代フェミニズム研究をめざす者に推薦される代表的な入門文献として必ず挙げられるのは、70年代フェミニズム運動を特集した雑誌 *Memoria*19-20合併号(1987)である。女性史の専門誌として1981年<sup>15)</sup>に創刊された、「記憶」を意味する *Memoria*は、この時期に開始されたフェミニストの歴史構築運動を牽引してきた貴重な媒体であり、「70年代フェミニズム運動」を特集タイトルとする本号は、「このテーマとこの時

代に近づきたいと思う者にとって今なお欠くことができない」(Guerra 2004)とされる文献である。だが、1987年のこの特集号に、新左翼運動とフェミニズムの関係や、左翼運動とフェミニズム運動への二重の参加(*doppia militanza*)を担うフェミニストの困難を論じる論考は存在するが(Gramaglia 1987, Zuffa 1987)、LFや家事労働賃金要求運動への言及は皆無である。この不在は、家事労働賃金要求運動が70年代イタリア・フェミニズム運動において周縁的な運動にとどまり、その影響力は限定的だったことを意味するのだろうか。

一方80年代に書かれた文献の中には、LFの動向、および家事労働賃金要求運動にそれなりにページを割いて論じているものも存在する。それらは上記*Memoria*誌特集号より以前に刊行され、70年代の運動の記憶の生々しさを感じさせる文献である。そこでは、LFおよび家事労働賃金要求運動はどのように論じられているのだろうか。

ここではまず70年代フェミニズム史再構築の初期に書かれた二冊の文献におけるLFおよび家事労働賃金要求運動についての言説を検討し、その後に*Memoria*特集号以降に書かれた文献を検討する。80年代の1冊目は、このテーマでは必ずといっていいほど引用される先駆的基本文献であるA.R.Calabrò&L.Grasso (1985) *Dal movimento femminista al femminismo diffuso* (「フェミニズム運動からフェミニズムの拡がりへ」)である。これは60~80年代のミラノにおける女性運動の動向を、当時の資料と当事者の証言に基づいて再構成した著作である。2冊目はイタリア系アメリカ人研究者、L.Chiovola Birnbaumによるイタリア・フェミニズムの包括的な歴史研究書、*Liberazione della donna:feminism in Italy* (1986)である。20世紀初頭からのイタリアの女性の歴史を振り返る本書の第二部は60年代後半以降の新しいフェミニズムの歩みを、活動家への精力的なインタビューに基づき概観した貴重な研究である。前者は70年代当時の運動内部の当事者た

<sup>15)</sup> 筆者は1980-82年の2年間イタリアに留学していたが、様々なフェミニストの集会や学生グループに参加した。1981年には中絶法をめぐる国民投票があり、女性運動は高揚していたが、この時期にはもはや家事労働賃金要求運動の動きも、それについての言及も皆無であった。

ちによる、後者は国境をも超えた外部の視点からの歴史の再構築と言える。これら80年代における代表的研究は、いずれも、*Memoria*特集号では触れられることもなくなるLFと家事労働賃金要求運動について、かなりのページを割いて論じ考察しているのである。

## 2.1 ミラノを中心とした70年代フェミニズム運動史

A.R.Calabrò&L.Grasso (1985) は、すでに述べたバダラッコ資料館の前身であるCSSMLDIが企画した著作である。70年代フェミニズム研究の初期の代表的文献としての評価は高く、後年の70年代フェミニズム研究においては必ず参照される文献である。サブタイトル「ミラノにおける60-80年代の歴史と歩み」に示されるように、イタリアの地域主義的運動展開を反映して、ここではミラノに限定した整理、分析が行われているが、ミラノだけでも数多く存在した多様なグループを整理するために、本書が採用した枠組みは、その後の研究枠組みの土台として踏襲されていくことになる。それはautocoscienza (コンシャスネス・レイジング) を基本にした内省的意識変革運動グループと、政治課題に向けて行動を組織していく社会的実践グループという二つのカテゴリへの分類である (Calabrò&Grasso 1985: 31-33)。両者には少なからぬ重なりもあり、社会的実践グループにおいても autocoscienza の実践が行われてきたし、内省的運動グループも政治行動には参加してきた。しかし本書の枠組みは、運動の志向性において対照的な二つの潮流があったとして、両者の対立構造を定式化している。

この二つの潮流の対立は1971年6月に開催されたミラノでの集会で明確化したと述べられている (ibid.: 68)。この集会にはトリノ、パドヴァ、トレント、フェッラーラ、ボローニャ、フィレンツェ、ピサのグループが参加したが、自分自身のことを話そうとするグループと、まだ「男性的」言語と政治実践に結びついているグループの分裂が生じたという。

興味深いことに、この記述において、前者に属するグループは、Rivolta Femminile (ミラノ)、Cerchio spezzato di Trento (トレント)、l'Anabasi (ミラノ) といったグループ名が挙げられているが、後者についてはここ



では具体的な名称は挙げられていない。そして新しいフェミニズムの傾向は、匿名の后者との対比によって特徴づけられている。

1972年に結成されたLFのミラノグループについては、「女を抑圧する文化とイデオロギーを家父長制に特定しているが、女性の状況をもっぱら社会的、経済的言語によって分析し、それによってautocoscienzaやセクシュアリティ分析を優先させる潮流とは一線を画していた」(ibid.:70-71)と解説されている。

しかし一方LFミラノグループはこの二つの潮流の交わる場所に位置づけられる、と本書では述べられている。ミラノグループは他の都市のLFとは異なり、autocoscienzaを重視するグループと交流し、自らもそれを実践していたからである (ibid.:71)。

以上の記述から浮かび上がるのは、1971年段階における2つの対照的な潮流というカテゴリ化の延長上に、1972年段階でのミラノの状況を通して、LFが位置づけられていることである。家父長制についての多少の留保はありながらも、LFは基本的に社会的経済的言語による分析に基づく政治実践グループにカテゴライズされている。他の都市のLFとは異なるミラノグループの特徴の強調は、むしろパドヴァ、フェッラーラに代表されるLFの主流がまさしく政治実践グループそのものであるという見方を、直接言及しないままに、強く示唆しているのである。それに対して、ミラノの運動の主流がautocoscienzaを重視する潮流に属していたことも、またautocoscienza実践重視の潮流に沿う立場こそが本書の基本的立ち位置であることも暗示されている。本書はミラノにおけるアーカイブ構築運動の初期のすぐれた成果物であるが、本書がその後の70年代フェミニズム研究に多大な影響を及ぼしていることを考慮すれば、ここで再構築されるフェミニズムの歴史において示唆される対立の枠組みは重要である。

本書では当時のミラノの代表的グループが、当事のグループ・メンバーへのインタビューによって紹介されており、Demau、Rivolta Femminile、l'Anabasiなど、ミラノを代表するグループとならんで、LFにも1節が当てられている (pp.182-188)。そこには、autocoscienzaに親和的なミラノのグループとパドヴァなどLFの主流派グループの間の対立が深刻化し

たことが1974年のLFの解散を導いたという語りが登場する。LFミラノグループは他の多くのミラノのグループとともにケルビーニ通りのスペースを拠点として共有していたが、そこには当初より感情的な対立があり、LFは他のグループから憎悪されていたと言う。以下は当時のLFミラノ・メンバーの回想である。

私たちは多分少し…嫌われていたと思います。だからといって個人的に共感し合える関係のある人たちがいなかったのではないのです。でもグループとして、LFとしての立場が感じられると、とたんに冷淡な拒絶の反応が出て来るのでした。(ibid.:186)

ミラノのLFはやがて二つの小グループでautocoscienzaを始め、パドヴァLFの運動方針やスタイルへの疑問を募らせて行く。ここでの対立軸は明白にautocoscienzaグループの内省的活動とLFの政治行動という活動方法および課題設定の相違として回想されている。そしてこの語りは、この対立軸がLF全国レベルでの議論に持ち込まれ、ミラノとパドヴァの対立、さらにLFの分裂へと展開していったという物語を裏付ける証言となっている。

小グループによる内省的運動という第二波フェミニズム運動のグローバルな特徴的スタイルは、政治的課題を設定して大衆を組織化し、その組織を拡大していくという新旧左翼の伝統的な運動スタイルへの批判と、そこからの差別化によって定義づけられていた。そして後者は明らかに、女性の課題を周辺化し排除してきた家父長的で男権的な運動スタイルとして位置づけられており、前者こそが新しいフェミニズムの本来的スタイルであるという暗黙の前提は、後者との差別化に依存して成立していたとも言えるのである。

このことは、70～80年代に英語圏で展開した家事労働やマルクス主義フェミニズムをめぐる論争の中でのマリアローザ・ダラ・コスタに対する批判を想起させる。例えばダラ・コスタはハイジ・ハートマンからは、「フェミニストのレトリックを用いているがマルクス主義者であってフェミニス

トではない」と批判されている（Hartmann 1981=1991）が、その一方で、イギリスCSE誌上で展開されたいわゆる家事労働論争においては、総じてダラ・コスタ（1972）はマルクス主義理論からは受け入れがたいものとして扱われている（Kuhn&Wolpe Eds. 1978=1984）。

LFは多くのメンバーが参加していた新左翼グループの、主としてポテーレ・オペライオPotere operaio<sup>16)</sup>からの批判的分離によって結成され、Potere operaioとの関係は、当初からむしろ対立的であった。1971年にはLFが予定していた集会が、新左翼グループの男たちの破壊的介入によって中止を余儀なくされるという事件が起きている（Schiavon, 1998）。当時パドヴァ大学教授であったPotere operaioのイデオログ、アントニオ・ネグリが、彼の助手であったダラ・コスタを授業から遠ざけたという記述もある（Zanetti 1998：166）。しかしautocoscienzaを重視するフェミニストグループにとっては、LFと伝統的左翼のマッコナ運動スタイルは基本的に同一視されていた。たしかにLFのスタイルには集団主義、組織主義、精鋭主義といった新旧左翼の伝統が色濃く残っていたことは、当時の資料からも否定できない。

1974-75年はイタリアにおいてフェミニズム運動が政治的プレゼンスをもっとも発揮した高揚期であった。1975年には初めての大規模な女性のデモがローマで実現したが、同時に代表的な新左翼グループであったLotta Continuaの男性メンバーによる女性の隊列の襲撃という、衝撃的な敵対行為が生じるなど、新左翼運動との対立もまた鮮明になった。そしてLFの全国組織としての活動の中止もまた、このピーク期のことであった。

新左翼運動との亀裂が決定的になっていく70年代後半に、70年代フェミニズム運動アーカイブ構築の動きが開始されたことは、フェミニズム運動が新左翼運動との対比、差別化によって自己定義していったことを暗示している。政治運動vs.autocoscienza（意識変革）という本書の二分法において、LFと家事労働賃金要求運動は新左翼運動に包摂される運動として、

<sup>16)</sup> 60年代後半のイタリア新左翼運動の代表的なグループのひとつであり、アントニオ・ネグリは代表的イデオログであった。

歴史構築の過程で排除されていったのではないだろうか。

## 2.2 英語圏研究者による70年代イタリア・フェミニズム運動史

一方、Chiavola Birnbaum (1986) は英語圏に向けてイタリア女性運動をその歴史的文化的特色の観点から概観する著作である<sup>17)</sup>。60年代末以降の新しいフェミニズム運動に焦点を当てて書かれた初の本格的な英語文献であるが、この戦前期からの長いタイムスパンによる概説的介绍において、LFおよび家事労働賃金要求運動は、それなりの比重をもって紹介され論じられている。このことはイタリアのこの特色ある運動潮流が国際的レベルにおいて、かなりのインパクトをもって受けとめられていたことを示している。新しいフェミニズム運動を概説する第2部は9章に分かれているが、うち1章が家事労働賃金要求運動に当てられ、詳細な紹介が行われている (pp. 132-142)。マリアローザ・ダラ・コスタ (1972=1980) において展開された家事労働論の概要が説明され、国際的な運動の展開、さらにイタリア国内におけるカトリック勢力等、フェミニスト以外の人々への波及を論じている。

Chiavola Birnbaum (1986) が強調しているのは、この要求が様々な立場に分断されたあらゆる女性、さらには男性を結びつけることができる可能性である。筆者自身がはじめてダラ・コスタ論文を読んだ時に受けた感銘も同種のものであった。ここで指摘される英国、米国、ドイツなどに及んだ運動の拡大と、70年代以降の国連による世界女性会議でのアンペイド・ワークへの政策的取り組みは無関係ではないだろう。先に取りあげたCalabrò&Grasso (1985) には、LFおよび家事労働賃金要求運動グループの運動スタイル等については述べられていても、その主要な政治課題であった家事労働への賃金要求キャンペーンをめぐる議論はほとんど取りあげられていない。

ここから明らかになるのは「フェミニズム」、とくにイタリアにおける

---

<sup>17)</sup> イタリア系アメリカ人の視点から捉えるイタリア女性運動の特色に関する議論は、フェミニズムのグローバルな展開についてきわめて示唆的な論点を含んでいるが、これについては別の機会に論じたい。

neofemminismo（「新しいフェミニズム」）と呼ばれることになった潮流の定義自体が、すでにautocoscienzaを重視するローカルな小グループを前提としており、さらに言えば、それは新左翼ラディカルズム、およびそれと同一視されたLFの運動スタイルの否定において定義された暗黙の了解に基づく前提であったのではないかということである。そのような観点からの70年代フェミニズム運動論においては、家事労働賃金要求運動はせいぜいフェミニズム運動の周辺に位置づけられる、もしかしたら、フェミニズム運動の中には含まれないかもしれない曖昧な位置におかれる潮流だったのであり、それがイタリア70年代フェミニズム運動論におけるLFおよび家事労働賃金要求運動の不在の要因のひとつなのではないだろうか。

### 2.3 90年代以降の70年代フェミニズム研究

運動の記憶がまだ生々しかった80年代の文献では、否定的な文脈ではあれLFと家事労働賃金要求運動は無視されることはなかったが、1987年の*Memoria*特集号以降、急速に豊富化していった70年代フェミニズム研究文献において、このLFの不在あるいは追加的言及への限定傾向は明確化していったように見える。

Passerini (1991) は、オーラルヒストリーの手法を用いて70年代フェミニズムの歴史の再構成を試みた画期的研究であるが、Passeriniは「イタリアのneofemminismoは、ラディカル・フェミニズムと定義できるだろう」(Passerini 1991 : 177-178) と述べ、具体的には70年代前半期の「Rivolta Femminile、フランスの「精神分析と政治」グループと連携したミラノとトリノのいくつかのグループ、そして様々な都市のグループや個人」と特定している。そしてこの潮流と同時代に「交流あるいは対立」していた潮流として、MLD<sup>18)</sup> およびLFを挙げている。A.R.Calabrò&L.Grasso (1985)に加えて、ここに示された70年代フェミニズムの定義がその後の研究状況に与えた影響は決定的であり、基本的にこの枠組みが継承されながら、「交

<sup>18)</sup> Movimento di Liberazione della Donna(「女性解放運動」の意)。ユニークな左翼政党であったPartito radicale (ラディカル党)の女性グループで、中絶の権利をはじめ性的権利要求運動を主要な課題のひとつとして活動した。

流あるいは対立」の部分においてのみLFへの言及がされてきたと言える。つまりMLDという政党（リベラル左派政党であるラディカル党（Partito Radicale）の背景をもつグループ）と列挙されるLFは、やはりフェミニズム「本流」からは排除されつつ「本流」をその「異質性」において定義する存在とされてきたのである。

2000年代に入ってなお、こうした傾向は継続している。イタリア女性歴史家学会（Società italiana delle storiche）が2005年に出版したBertilotti&Scattigno編、*Il femminismo degli anni Settanta*（『70年代フェミニズム』）にはPasserini、Guerra、Rossi-Doriaら90年代からの代表的研究者の論考が収録されているが、ここでのLFおよび家事労働賃金要求運動への言及は限定的である。LF関連の言及は、LFが4回、セルマ・ジェイムズが3回あるのみで、ダラ・コスタへの言及はゼロである。家事労働賃金要求を名称に掲げる諸団体もまったく言及されていない。

しかしLFや家事労働賃金要求運動を中立的な視点から論じる文献もなかったわけではない。そうした文献の代表的なものとして、Ribero&Vigliani（a cura di）; *Cento titoli*（1998）、およびZumaglini, *Femminismi a Torino*（1996）の2本を検討する。

「70年代フェミニズムを論じる読書案内」の副題をもつRibero&Vigliani（a cura di）; *Cento titoli*（1998）は、56名の執筆者による100冊の文献を紹介・解説する、70年代フェミニズム研究の基本文献のひとつである。本書は1955年に研究者、ジャーナリストらがトリノで設立したCentro Studi e Documentazione del pensiero femminile（女性思想研究資料センター）によって刊行されており、この団体もまたRete Lilith（ネットワーク・リリス）に参加している。100冊の中には、LFに関する4つの文献が選択されている。ダラ・コスタ（1972）、LFの機関誌*L'Offensiva*、さらに家事労働賃金要求を掲げて国際的に活動を展開したフェミニスト国際コレクティブの2冊の刊行物である<sup>19)</sup>。100冊の中には70年代フェミニズムの著名な英語

<sup>19)</sup> Mariarosa Dalla Costa et al., *Potere femminile e sovversione sociale*（1972）、Lotta Femminista, *L'Offensiva*（1972）、Collettivo Internazionale Femminista, *8 Marzo 1974*（1974）、*Aborto di stato: strage delle innocenti*（1976）。

文献も含まれていることを考えると、100冊中4冊という割合は、けっして低いとは言えない。トリノで出版された本書ではLFおよび家事労働賃金要求運動は比較的十分に評価の対象として位置付けられていると言える。そしてそこでは次のような重要な「違い」が指摘されている。

*L'Offensiva*で用いられる言語はフェミニズム運動のもっと典型的な言語と比べて明らかに異なる。それは「書き言葉」の傾向が強い文体で、そこでは主語はほとんどつねに三人称であり、さらにはしばしば「資本」のように抽象化されている。この文体は、また、(訳注：集会記録集である) *L'Offensiva*の基になった集会が伝統的な方法で組織されていたことを反映している。(ここでの方法のように) 発言が予定され、発表者は聴衆の前で話す、という進め方は、後年完全に崩れていく。(Schiavon 1998)

「フェミニズム運動のもっと典型的な言語」とは、*autocoscienza*に典型的にあらわれる一人称としての女である。第二波フェミニズムの特徴とされる「女性という主体」がそこから自らを差別化した伝統的言語に、LFの言語は位置づけられている。言語的にはLFは男性新左翼運動に分類され、新しいフェミニズムはそこからの差別化によって定義されている。さらにSchiavonは、LFの全国的展開、政治課題優先の大衆運動のスタイル、そしてプロパガンダへの情熱などの特徴は、いずれも新左翼ラディカリズムと酷似しており、使用される語彙や表現もまた同様であった、とも述べている (Schiavon 1998)。

Zumaglin (1996) は、LFとミラノのフェミニストの対立、およびLFの分裂について、比較的客観的中立的視点からの考察を行っている。おそらくは90年代以降に出た文献の中でLFと家事労働賃金要求運動に十分に言及し、もっとも客観的にLFおよび家事労働賃金要求運動と他のフェミニズム運動の対立と断絶を叙述している例外的文献である。トリノにはLFの労働論に強く関心を持つフェミニストたちが存在していた<sup>20)</sup>が、LFのトリノ支部は設立されることはなかった。Zumaglin (1996) には、個人として活動しているにもかかわらず、LF支部のように扱われていた

ことへの不満を述べるメンバーの語りも登場し、大規模組織として広域に展開したLFが抱えていた組織運営上の問題が示唆されている。一方でZumaglinoには政治運動と個人的文化的意識変革運動の対立の克服をめざす志向性が強くうかがえるが、にもかかわらず、対立を引き起こす問題がどのようなものであったのかについては、人間関係レベルでの対立に関する具体的な記述はやや過剰に存在するが、そうした現象の背景にある構造は必ずしも整理されておらず、明確化されているとはいえない。

Zanetti (1998) は、70年代フェミニズム史関係文献の中で、ほとんど唯一LFと家事労働賃金要求運動を全面的に取りあげた文献と言っているものである。

本書はLFの拠点であったパドヴァとその影響下にあった地域を含むヴェネト州における70年代フェミニズム運動の記録であり、LFの活動および分裂とその後の運動の展開を詳細に記述している。しかしここではLFと他の潮流の対立にも、LF分裂の際の議論にも踏み込んだ考察はなく、70年代イタリア・フェミニズムの歴史構築という土俵への異なる視点からの参加の意志が直接的に表明されているわけではない。しかし語られることの乏しかったLFを含むヴェネト州のフェミニズム運動についての一次資料に基づく記述は、それ自体がLFを無視あるいは等閑視してきたフェミニズム運動史構築に対する暗黙の異議申し立ての役割を果たしていると言える。

このように、70年代イタリア・フェミニズム史において、LFおよび家事労働賃金要求運動については言及されることすら乏しく困難であるという状況の背景には、70年代イタリア・フェミニズム史が「政治運動」との対立によって構築されてきたという、単なる人間関係的な確執<sup>21)</sup>を超えた

<sup>20)</sup> 1971年にLFのOffensiva（攻撃）と題する会議をPotere operaioの男性活動家たちが襲撃する事件が起こったが、その後にトリノに同名を名乗るグループが結成されている。

<sup>21)</sup> LFのメンバーであったフェミニストたちの中には、今日なお情緒的レベルでのわだかまりを含んだ対立が克服されていない状況を、2010～2013年に実施した聞き取り調査により知ることができたが、この情緒的対立の土台にある構造を読み解くには、運動に対する共感とともに、この運動に一定の距離をおいた、外部からの視点が不可欠である。



構造的要因の存在が推察されるのである。第3章ではこうした状況によってフェミニズムが直面するいくつかの課題について考察したい。

### 第3章「労働」概念は変化したのか？——フェミニズム労働論の課題

第二波フェミニズム運動の「第二波」と名付けられるその「新しさ」は、身体、生殖、セクシュアリティなど、従来の男性中心的社会運動が無視、軽視してきた課題に焦点を当て、近代社会の価値中立性の神話のベールを暴いたことであった。フェミニストの「家父長制」概念は、民主的とされてきた家族や個人生活における男女の関係の男性中心性を告発する概念であったが、「家事労働」もまた、労働とは見なされてこなかった家事を「労働」と定義し、家族の中の労働関係、そして家族と市場の労働関係をめぐる議論を牽引するキー概念として機能したと言える。この課題は、「労働」をもっとも重要な課題とする男性中心的運動に対するラディカルな批判とともに取り組まれて来た。家事を労働として論じる家事労働論もまた、そうした気運の中から登場した。「労働」概念の拡張によって、階級闘争を基本とする伝統的社会運動史観が暗黙の前提としてきた（男性）労働者中心性に揺さぶりをかける運動が志向されたと言える。

リプロダクション（生殖＝再生産）と家事労働をつなぐ「再生産労働」概念は、私的領域の「見えない」労働を可視化することによって「労働」と「生命活動」の二項対立を超えうるミッシングリンクとして登場したのであった。

さらに、「再生産＝生殖」を視野にいれた「労働」概念の拡張は、単なる拡張にとどまらず、70年代以降に顕著になっていく市場労働自体の変化、すなわちサービス労働の急激な拡大と労働力の女性化としての「労働」の変質をも示唆するものであった<sup>22)</sup>。

70年代イタリア・フェミニズムの理論と運動には、当然ながらいくつかの対立と分裂に示される多様性、複数性が存在したが、フェミニスト・

---

<sup>22)</sup> 伊田（2009）参照。

アーカイブ構築運動を経て、70年代史は、autocoscienza（意識変革運動）を中心に、それとは異なる運動スタイル、とりわけLFおよび家事労働賃金要求運動との差別化によって、定義され構築されてきたと言えるのである。

このことは、70年代フェミニズム運動の内部に混沌とした状態ながら存在していた身体、生殖、セクシュアリティの視点からの「労働」概念の問い直しの気運を、結局は頓挫させてしまうことになったのではないだろうか。

国際社会においては「労働」概念の見直しは、アンペイド・ワークの測定・評価の課題や社会政策の変革、ワーク・ライフ・バランスなどの政策への動きとして展開し、ディーセント・ワークの提唱など「(市場内)労働」のあり方を問い直す契機となってきた<sup>23)</sup>。しかしイタリア国内において、こうした国際社会における家事労働賃金要求運動のインパクトは今日に至るまでほとんど顧みられることなく、むしろ新たに外部から入って来た課題として受容されているのが現状である。近年イタリアでもさかんに議論されるワーク・ライフ・バランスのような課題について、70年代イタリアの家事労働をめぐる運動の問題提起と関連づける議論はほとんどされていない。今のところ筆者が唯一発見したのはフェミニスト経済学者のピッキオのインタビュー記事である（A. Picchio 2009）。

1983年にZumaglinらトリノのフェミニストはProdurre e riprodurre（生産と再生産）と題する国際会議を開催し、「労働」をめぐるフェミニズムの議論を包括しようと試みた。雇用労働、自営労働などとともに主婦労働を位置づけ、社会的サービスを公的サービスだけでなく私的サービスを含めたものとして定義し、さらに生殖やセクシュアリティを、この「労働」をテーマとする会議に位置づけていること等に、その後フェミニズム運動の中でも希薄化していった70年代フェミニズム運動のひとつの志向性を、いまだ同時代のものとして活き活きと伝えているように思える。LFおよび家事労働賃金要求運動への直接的な言及があるわけではないが、女

<sup>23)</sup> 第3回世界女性会議のナイロビ将来戦略は家事労働を含む無償労働の測定評価の課題を初めて明記したが、その背景にはこの会議でのセルマ・ジェイムズ（ダラ・コスタの共著者、翻訳者）とそのグループの熱心なロビー活動があったことを銘記したい。

性の労働という伝統的なテーマを70年代フェミニズムを経た新しい視点で再定義するラディカルな枠組みの提案が、会議全体を貫いている。

「労働」概念の見直しへの萌芽となりうるこの気運は、しかし、その後新たな展開を見ることはなかった。「再生産労働」が再び論じられるようになるのは、労働力の女性化と移民の女性化により、有償家事労働者が増加していく90年代後半以降のことである。

イタリアのフェミニストたちのアーカイブ構築の努力によって各地に整理保存されている70年代の一次資料からは、再構築された70年代フェミニズム史における周辺化にもかかわらず、LFおよび家事労働賃金要求運動の質的量的存在感の大きさを知ることができる。一次資料にみるLFおよび家事労働賃金要求運動の歴史の再検討を次の課題として、ひとまず筆を置くこととしたい。

#### 【主要参考文献】

- AA.VV.(1984), *Produrre e riprodurre—cambiamenti nel rapporto tra donne e lavoro: Primo Convegno internazionale delle donne dei paesi industrializzati promosso dal movimento delle donne di Torino, Palazzo del Lavoro 23-24 e 25 aprile 1983*, Cooperativa Editrice, il manifesto anni '80, Roma.
- AA.VV.(1987), *Il movimento femminista degli anni '70, Memoria* nn.19-20, 1987.
- Teresa Bertilotti & Anna Scattigno(a cura di)(2005), *Il femminismo degli anni Settanta*, Viella, Roma.
- Annarita Buttafuoco & Emma Baeri(a cura di)(1997), *Riguardarsi: Manifesti del movimento politico delle donne in Italia*, Protagon, Siena.
- Anna Rita Calabrò & Laura Grasso(1985), *Dal movimento femminista al femminismo diffuso—Storie e percorsi a Milano dagli anni '60 agli anni '80*, Fondazione Badaracco, FrancoAngeli, Milano.
- Lucia Chiavola Birnbaum(1986), *Liberazione della donna—feminism in Italy*, Wesleyan University Press.
- Mariarosa Dalla Costa(1971), *Donne e sovversione sociale*, in Mariarosa Dalla Costa & Selma James(1972), *Potere femminile e sovversione sociale*, Marsilio Editori, Venezia. グループ7221訳(1980)「女性のパワーと社会の変革」ザレツキイ編『資本主義、家族、個人生活』亜紀書房.
- Fondazione Badaracco(2003), *Archivi del femminismo. Conservare progettare*

*comunicare: Atti del convegno, 5-6 ottobre 2001*, fondazione Badaracco, Milano.

- Elda Guerra(2004), *Femminismo / femminismi: appunti per una storia da scrivere*, Genesis III/1, 2004, Viella, Roma.
- Mariella Gramaglia(1987), *Affinità e conflitto con la nuova sinistra*, in *Memoria* nn. 19-20, 1987.
- Heidi Hartmann(1981), *Unhappy Marriage of Materialism and Feminism*, in Lydia Sargent (Ed.) (1981), *Women and Revolution: A Discussion of the Unhappy Marriage of Marxism and Feminism*, South End Press, Boston. 田中かず子訳 (1991) 『マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚』
- 伊田久美子 (2009) 「労働力の女性化」から「労働の女性化」へ ——愛の労働のゆくえ」現代思想2009年2月号
- 伊田久美子 (2010) 「マルクス主義フェミニズム: M.ダラ・コスタ「女性のパワーと社会の変革」」(伊藤公雄・井上俊編『近代家族とジェンダー』世界思想社に収録)
- Annette Kuhn & AnnMarie Wolpe(Eds.) (1978), *Feminism and Materialism: Women and Modes of Production*, Routledge & Kegan Paul Ltd. London. 上野千鶴子他訳 (1984) 『マルクス主義フェミニズムの挑戦』勁草書房
- Luisa Passerini(1991), *Storie di donne e femministe*, Rosengerg & sellier, Torino.
- Antonella Picchio(2009), Pausa lavoro, *Via Dogana* n. 89, giugno.
- Aida Ribero & Ferdinanda Vigliani(a cura di) (1998), *Cento titoli : Guida ragionata al femminismo degli anni Settanta*, Centro studi e documentazione pensiero femminile, L. Tufani, Ferrara.
- Emma Schiavon, *L'Offensiva*, in Aida Ribero & Ferdinanda Vigliani(a cura di) (1998), *Cento titoli : Guida ragionata al femminismo degli anni Settanta*, Centro studi e documentazione pensiero femminile, L. Tufani, Ferrara.
- Marina Zancan(2003), *Conservare, pregettare, comunicare*, in Fondazione Badaracco(2003), *Archivi del femminismo. Conservare progettare comunicare: Atti del convegno, 5-6 ottobre 2001*, fondazione Badaracco, Milano.
- Anna Maria Zanetti(1998), *Una ferma utopia sta per fiorire —Le ragazze di ieri: idee e vicende del movimento femminista nel Veneto*, Marsilio Editori, Venezia.
- Grazia Zuffa(1987), *Le doppie militanze. Donna comunista, donna femminista*, in *Memoria* nn. 19-20, 1987.
- Piera Zumaglin(1996), *Femminismi a Torino*, FrancoAngeli, Milano.